The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ゾルフと第一次世界大戦 : 城内平和と懐疑、植民地の回復
Author(s)	中村, 綾乃
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 13-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72776
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ゾルフと第一次世界大戦
―城内平和と懐疑、植民地の回復―

中村　綾乃

1　はじめに

1936年2月6日、ヴィルヘルム・H・ゾルフ（Wilhelm H. Solf）はベルリンの自宅で病死する。享年70歳であった。ゾルフは、ナチスの台頭を阻止するべく奔走し、1933年以降も政権批判を憚らなかった。ナチ党の圧力が加わり、ゾルフの死亡記事は略歴が記されたのみの簡素なものであった。作家のモラス（Joachim Moras）とロアン公爵（Karl Anton Prinz Rohan）が追悼文を寄せ、ゾルフの功績を称えているが、政治色は払拭されている[1]。

ベルリン中心部のインヴァリーデン墓地にゾルフの墓石がある。この墓地は、プロイセンの国王フリードリッヒ二世によって作られたもので、ナポレオン戦争から第二次世界大戦までの戦死者、政治家や軍人が埋葬されている。戦後、この墓地を含む一帯は東西ドイツの国境の緩衝地区となり、立ち入りが禁止された。冷戦期、東ドイツ政府が設置した監視塔や壁の跡が残る一角にゾルフの墓石がある[2]。墓石には、1918年10月から同年12月まで外務長官、1920年から1928年まで駐日大使という彼の略歴が刻まれている。なおゾルフは、1911年12月から1918年まで植民長官、その前職はドイツ領サモアの総督であったが、もっとも長かった植民地行政官としての経歴はこの墓石には記されていない。

インヴァリーデン墓地のゾルフの墓石（筆者撮影）

ゾルフの死から二か月後の4月6日、東京の築地本願寺でゾルフの追悼式が催された。後藤新平の私設顧問であった森孝三は、この追悼式の一部始終を伝えるべく、大久保利武の弔辞の原稿を添えて、ゾルフの遺族に書簡を送った。この書簡によれば、この追悼式には、ドイツ側からドイツ大使のディルクセン（Herbert von Dirksen）の他、大使館の関係者、ドイツ企業や学術団体、文化交流事業の代表者、日本側から首相の広田弘毅の他、重光葵や大久保利武などが参列していた。会場に飾られた花輪

---

[1] BArchK, N1053-157.

[2] ゾルフの死去から18年後の1954年、ゾルフの妻ハンナ（Hanna Solf）が死去する。ゾルフの遺灰は妻とその家族とともに、ミュンヘン郊外のシュタルンベルクの墓地に埋葬されている（Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T.(2005), *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag, S. 223）。

は、ゾルフと親交のあった後藤新平の親族、星製薬の創業者星一、大阪医科大学の佐多愛彦から寄贈されたものであった。

この追悼式を主催したのは、日独協会をはじめとする親交団体、京都のドイツ文化研究所、東京のドイツ東洋文化研究協会であった。追悼式は雅楽の演奏とともに始まり、大久保が口火を切るべく弔辞を述べた。

故人のゾルフ氏は東アジアの文化に関心を寄せておられ、自他ともに認める親日家でした。外国人の中で彼ほど日本のことを理解している人物はいないでしょう。故人は、貿易を促進することで物の行き来を盛んにするのみならず、東と西の世界の人々の心を通い合わせることができる、そうすることで初めて、大使としての職務を全うできると考えておられました。目下、我々が手掛けている対外的な文化活動は、国際的な文化振興協会のような大所帯の組織によって、期待以上の発展を遂げましたが、故人の先見の明、そして先駆的な活動に負うところが大きいのです[3]。

この東京で行われた追悼式には、時の首相の広田をはじめとする政財界の要人が参列しており、ベルリンで挙行された葬儀よりも盛大なものであった。

1862 年、ゾルフはベルリンの富裕な商人の父ヘルマン（Hermann）と母アウグスタ（Augusta）の四男として生まれた。1881 年から 85 年にかけてベルリン、キール、ゲッティンゲン、ハレの大学でサンスクリット語とインド哲学を修め、博士号を取得した。1889 年、27 歳で英領インド・カルカッタのドイツ領事館の通訳官に抜擢される。ゾルフの最初の赴任地は英国植民地であった。翌 1890 年、通訳官から領事代理となったが、新たに着任した領事のハイキング（Edmund von Heyking）と対立し、職を辞して帰国する。帰国後、イェーナの大学に入り直し、法学を修めた。1896 年、上級官僚試験に及第し、幹部候補生として外務省に入った。入省後、ドイツ領東アフリカのダルエスサラームで裁判所判事を務めた。そして 1899 年、米英独の三国の係争地となっていたサモアの外国人評議会の会長に就任する。この外国人評議会は、ドイツ代表のシュテルンブルク(Hermann Speck von Sternburg)、アメリカ代表のトリップ（Bartlett Tripp）、イギリス代表のエリオット（Charles Eliot）が委員を務めた。なおエリオットとゾルフは、後にともに駐日大使となり東京で再会する。

1899 年、米独間でサモアを分割することが取り決められ、翌 1900 年、ヴィルヘルム二世は西サモアの領有を宣言する。アピアにドイツ総督府が設置され、ゾルフは初代総督に任命された。約 10 年間、サモアで総督を務めた後、植民長官となり、植民地統治を率いていく。第一次世界大戦中の 1918 年 10 月、外務長官を兼任し、宰相のバーテン公マックス（Max von Baden）の下で停戦交渉にあたった。ヴェルサイユ講和条約締結の翌年、1920 年 4 月、ゾルフは新体制の下で駐日大使に任命される。そして同年 8 月、家族を連れて来日した。駐日大使として、1926 年 8 月には日独染料協定、翌 1927 年 7 月には日独通商協定の締結に尽力し、さらに個人的に親交を深めた後藤新平とソ連大使の仲介役も務めた[4]。

駐日大使の職を最後として外務省を辞職したが、その後も駐米大使、リットン調査団のドイツ代表の候補としてゾルフの名前は挙がった。1932 年 3 月、現職のヒンデンブルク（Paul von Hindenburg）の後継を争う選挙が行われた。当初、ヒンデンブルクは高齢のために出馬は難しいとされ、有力候補としてゾルフの出馬が見込まれていた。しかし、首相のブリューニング（Heinrich Brüning）をはじめとする共和国派はヒトラーの当選を阻止するために、高齢のヒンデンブルクを担ぎ出したためにゾルフの出番はなかった。

本稿では、第一次世界大戦期のゾルフの事績を跡づける。ゾルフは、依然として貴族が優位であった外交官の世界の中で、市民階級出身の学究者として頭角をあらわしていく。ヴィルヘルム期からナチ体制初期までの政治外交の帰趨を握った人物であるが、親英家、厳格な植民地行政官、リベラリスト、保守派、帝政派、親日家、反ナチ派というように、時代ごとに異なる人物像が浮かびがる。日本では、フランス大使のクローデル（Paul Claudel）と先述のエリオットとともに 1920 年代に活躍した文人大使として知られている。親英家、保守派、リベラル派といった紋切り型の人物像では捉えきれないゾルフの事績を通して、ドイツ帝国から世界帝国へ、第一次世界大戦、共和国の成立から崩壊へ、そしてナチズムの時代を描くことが今後の研究課題である。本稿はその布石となるものである。

---

[3] 森孝三がゾルフの遺族に宛てた書簡は、ゾルフの個人文書の中に収められている（BArchK, N1053-157）。

[4] Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Japanisch-Deutsche (2005) *Brückenbauer: Pioniere des Japanisch-Deutschen Kulturaustausches*, München: Iudicium, S. 73-76.

本稿で依拠する先行研究と史料は以下の通りである。まず 1961 年に刊行されたヴィッチュ（Eberhard von Vietsch）による伝記『ヴィルヘルム・ゾルフ』が挙げられる[5]。この一冊目の伝記が刊行されてから約 40 年後、ヘンペンストール（Peter J. Hempenstall） とタナカ・モチダ（Paula Tanaka Mochida）によって、二冊目の伝記『忘却された人』が世に出た[6]。この二冊の伝記からゾルフの事績を跡づけることができる。また筆者は、帝政期のドイツ領サモアにおける住民の法的身分をめぐる議論に焦点を合わせ、植民地統治における支配者と被支配者の構造を分析した。同研究の中で、植民地行政官としてのゾルフの事績に焦点をあて、彼の植民地構想を明らかにした[7]。

一次史料として、第一次世界大戦中にゾルフが著した『将来の植民政策』（*Kolonialpolitik*）が挙げられる。政治的遺言という副題がつけられた同書は、九州帝国大学の植民地政策学者長田三郎によって日本語に訳され、1926 年に有斐閣から出版された。同書からゾルフの植民地構想を知ることができる[8]。またヴィッチェは、第一次世界大戦中の 1915 年から 1918 年にかけて、ゾルフとメッテルニッヒ（Paul Graf Wolff Metternich）の往復書簡を編纂している[9]。ゾルフの個人文書は、コブレンツのドイツ連邦文書館に所蔵されており、上述の先行研究もこの個人文書に依拠している。

２　城内平和と懐疑

1914 年 6 月、「サラエヴォの銃声」が引き金となり、戦争の気運が一気に高まる。翌 7 月 28 日、ドイツの後ろ盾をえたオーストリアは、セルビアと開戦した。一方、ロシアはセルビアへの支援を明らかにし、総動員を開始した。8 月に入り、ドイツはロシアとフランスに宣戦布告した。ドイツ軍は、ルクセンブルクに続き、ベルギーの中立を侵して占領した。このベルギーの中立侵犯によって英国がドイツに宣戦布告をすることとなり、世界戦争の火蓋が切られた。

ヴィルヘルム二世は、王宮前広場に集まった群集を面前にして、「国民の中に党派はない、ただドイツ人だけがいる」と言い、危機打開のために国民が一致団結することを呼びかけた[10]。開戦の是非はほとんど議論されず、政党間と対立、階級と労働組合の闘争が一次停止され、戦争遂行への合意形成がなされたのである。

内閣の一翼を担っていたゾルフは、宰相のベートマン・ホルヴェーク（Theobald von Bethmann Hollweg）に追随し、祖国防衛という戦争の大義を支持した。ヘンペンストールの伝記によれば、開戦当初、兄のオットー（Otto Solf）に宛てた書簡の中で「ドイツの開戦は避けられず、外交戦略に間違いはない」、「世界中がドイツの力に嫉妬している」、「ドイツは二つの前線で戦う準備はできており、英国はそのことを恐れているだけなのは明らか」、「ベルギーとオランダはドイツのものになるだろう。さらば英国、英国が思いのままに振舞う時代は終わった」と息巻いていた[11]。兄のオットーは、商業顧問官を務めていた。

戦争を支持した教養市民層の政治家や知識人、資本家、国粋主義者らは、開戦時の団結を「1914 年の理念」と称揚した。開戦の翌年、この「1914 年の理念」をスローガンに掲げたクラブであるドイツ協会 1914 が発足する。同協会の発起人は、帝国宰相のベートマン・ホルヴェーク、ヴァイマル期に外相を務めるラーテナウ（Walther Rathenau）、銀行家のグートマン（Herbert Gutmann）、作家のフォルメーラー（Karl Vollmoeller）である。発起人の顔ぶれからもわかるように、同協会の会員には政財界の要人から作家、科学者などが名を連ねた。名の知れた会員には作家のマン（Thomas Mann）とヘッセ（Hermann Hesse）、ノーベル賞学者のアインシュタイン（Albert Einstein）やハーバー（Fritz Haber）がいる。またラーテナウやグートマン、アインシュタインもそうであるが、同協会にはユダヤ人の会

---

[5] von Vietsch, Eberhard (1961) *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

[6] Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T.(2005).

[7] 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層－混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編（2017 年）『ドイツと東アジア　1890-1945 年』東京大学出版会。

[8] ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳（1926 年）『将来の植民政策』有斐閣。

[9] von Vietsch, Eberhard (Hrsg.)(1964) *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.

[10] 成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）『ドイツ史 3』 山川出版社、83 頁。

[11] Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 114.

員が多く、全会員数の約 3 割から 4 割ほどを占めた。ゾルフは、このドイツ協会 1914 の初代会長となる。

1915 年 11 月、発足に合わせて、ベルリンで会合が開催された。会場はウィルヘルム通りのプリングスハイム館であった。ロバート・ボッシュの創業者であるボッシュ（Robert Bosch）も会員の一人である。ボッシュがスポンサーとなったことで、会合に際してはプリングスハイム館を使うことができたのである[12]。この最初の会合では、まずゾルフが登壇し、発足宣言というべき演説を行った。演説の中でゾルフは、「出身や社会層、職業さまざまな出身、社会層、職業の者に開かれた場」として同協会を位置づけ、「偏見にとらわれず、自由に意見を述べる場」とすることを述べている[13]。さらにゾルフは、「同協会は、ドイツという国の土台になるであろう」と述べた[14]。

同協会の発起人であるフォルメーラーもまた、特定の政党や党派、主義主張の政治団体ではないことを強調していた。入会に際して、出身、年齢や職業、社会的地位、支持政党、家族構成が問われることはなかった。ただし、社会身分や職業は問われないものとされたが、技術者や手工業者などの労働者の会員はいなかった。また女性の入会も例がなかった。同協会の会員数は、1916 年に 1200 名、翌 1917 年には 1800 名を超えた。戦後の 1921 年、同協会の会員数は 2800 名に達したが、その後会員数は減少の一途をたどる[15]。

ドイツ協会 1914 は、いわゆる政治クラブは英国の影響を受けたものであるが、政財界のみならず、作家や科学者、知識人も射程に入れて結束をはかったところにゾルフの意向が汲まれている。ドイツを代表する歴史家のマイネッケ（Friedrich Meinecke）によれば、これほどまでに多様な職業、世界観と政治志向を持った者が集ったクラブはドイツ史上類を見ないものであった[16]。

1914 年 11 月、ゾルフはベルギーの占領地域を視察している。視察後、ドイツへの併合に否定的な見解を抱くようになった。ヴィッチェによる伝記には、家族や知人に宛てた手紙が引用されており、ゾルフの本音がうかがえる。以下、1915 年 4 月 17 日付けでゾルフが妻ハンナへ宛てた書簡の引用である。

ベルギーをドイツの管理下に置くことがいかに大変かということを、彼（訳者註：ベルギーの占領を掌るビッシング）でさえ、さほど深刻に捉えておらず、一般的な兵役義務をうまく導入することでフランドルとワロンのドイツ化が平和的になされると信じているのです。彼もそうですが、現地政府の役人もまた、このことについて何ら論拠を示せないでいるのです。自分と違う意見をすべてのドイツ人に通すことなどできないのですから。ビッシングの意見には驚きませんが、ランケンもビッシングとまったく同じように考えていることがわかり、あきれるばかりです。それどころかランケンは、我々ドイツ軍の兵士が血を流し、ドイツ人の総力をつぎ込んでベルギーを占領したのであり、それを引き渡すようなことになれば、どれほど不名誉であり屈辱になるかと。ベルギーを引き渡せば、戦争中の国も中立国も我々を相手にしなくなるであろうと。それゆえドイツが現在の地位を失い、それから何年もの間、二等国の地位に甘んじなければならないという不幸な事態に備えて、我々がベルギーをとるか、あるいは我々が無残に占領されるか、決着がつくまで戦い続けなければならないというのです。冷静な人もまた、扇情的な集団心理におかされてしまっているのを目の当たりするのは悲しいことです[17]。

ゾルフは、ベルギーからの撤退をホルヴェークに進言したが、説得には至らなかった。1915 年 5 月 8 日、ゾルフがメッテルニヒに宛てた書簡には、次のようなホルヴェークの発言が引用されている。

帝国宰相の発言は、依然としてこのような常套句です。「征服するために開戦したのではない。ベルギーを獲得するために、攻め入ったのではない。しかしこの戦争の過程で、ベルギーが敵国側につくと、いかにドイツにとって脅威となるかということがはっきりした。この脅威を排除することこそ、平和のための課題の本丸である。脅威をどのように、そしてどの程度排除できるのかは、我々の敵国の出方による」というのです[18]。

---

[12] Tunnat, Frederik D (2014) *Die Deutsche Gesellschaft 1914 und ihr Gründer,* Berlin: Edition Vendramin, S. 93-96.
[13] Vietsch (1961), S. 142.
[14] Tunnat (2014), S. 95.
[15] Tunnat (2014), S. 95.
[16] Vietsch (1961), S. 144
[17] Vietsch (1961), S. 155-156.
[18] Vietsch (1964), S. 26.

さらにゾルフは、無制限潜水艦作戦に警鐘を鳴らし、海軍大臣のティルピッツ（Alfred von Tirpitz）と対立した。しかしベルギーからの撤退と無制限潜水艦作戦の中止を求めるゾルフの意見は少数派で、軍部と対立したばかりか、閣僚の中でも孤立していく。自らの人脈を使い、米国を仲介としての和平交渉を進めようとしたが、功を奏さなかった。

1915 年 7 月 15 日付のメッテルニヒに宛てた書簡の中で、ゾルフは「戦争が長引けば長引くほど、我々が掲げる倫理的な概念、芸術家の考え、学問的な信念、誠実さと信頼といったすべてのもの、人々の行き来、関係を密にし、実体のあるものとし、高い水準にまで押し上げてきた長年にわたるはかりしることのできないものが打ち砕かれ、あとかたもなく崩れ去るのではないかと恐れている」と綴っている[19]。

公私にわたる付き合いがあったメッテルニヒとは、ベルギーの占領とアルザス・ロレーヌの帰属、無制限潜水艦作戦、対英国戦略、ウィルソン外交の評価など、個々の問題について具体的な戦略を論じていた。伯爵の爵位を持つメッテルニヒは、ゾルフよりも 10 歳ほど年上であり、ゾルフが外交官としてのキャリアをスタートさせた頃、駐英国大使を務めていた。

1917 年 9 月 18 日付けの書簡において、メッテルニヒは自らの戦略について次のように述べている。

私の目的は、敵国の国民に疑念を抱かせるということです。彼らの政府ではありません、政府に働きかけるのは骨折り損でしかないのです。どのような疑念かといえば、彼らのやっていることが本当に正義なのか、またドイツだけに戦争の責任があるのか、そしてヨーロッパが安定した状態になるまで戦争を続けなければならないのかいうことです。英国の労働者の間で、この三つの疑念が沸き上がるようになれば、ボクサーの政府はもたないでしょう[20]。

ゾルフとメッテルニヒの往復書簡では、しばしば隠語が用いられている。この書簡で、メッテルニヒは「ボクサーの政府」という表現を用いているが、これは英国のロイド・ジョージ（David Lloyd George）の内閣を指している。1916 年 9 月 28 日の会見で、当時陸軍大臣であったロイド・ジョージは、「ドイツがノックアウトするまで英国は戦い続ける」と息巻いた。この時の発言から、二人の間ではロイド・ジョージをボクサーと呼んでいた[21]。

開戦から二年半後の 1917 年 2 月、兄のオットーに宛てた手紙において、ゾルフは開戦時に認めた手紙の文言を取り消して、政府の誤算と軍事指導体制を批判していた。そして城内平和の前提であった防衛戦争としての戦争目的への疑問を強めていった。ゾルフは、戦線を拡大させながら、講和交渉の可能性を探る目下の政府の戦略を「一方の手にオリーブの木（訳者註：平和の象徴）、もう一方の手にはピストルを握っている」とし、「奇跡でも起こらない限り、ドイツは敗れる」と確信していた[22]。

自らが会長を務めたドイツ協会 1914 からも距離を置くようになる。ヴィッチェの伝記の巻末には、ラーテナウに宛てたゾルフの書簡が収められている。この書簡の冒頭で、ゾルフは次のように綴っている。この書簡の日付は、1917 年 5 月 8 日となっている。この前日、ゾルフはドイツ協会 1914 の役員会に出席していた。この役員会では、出席者が激高する場面あったようである。

ドイツ協会 1914 がその創設から掲げてきた理念、1914 年の理念からこんなにもかけ離れたものになったことが遺憾で、私自身の心に圧し掛かっています。（中略）とても悲しく、希望をなくして帰路についた[23]。

帝国議会とプロイセン議会における保守派と左派の対立がドイツ協会 1914 にも波及し、亀裂を深め、もはや城内平和は成立しなくなっていたのである。

ベルギー問題について、ゾルフは歴史家のヴァレンティン（Veit Valentin）が近々出版する著作『ベルギーとグローセ・ポリティーク』の草稿を入手し、独自に分析を進めていた。メッテルニヒに宛てた書簡の中で、同書の内容を紹介している。この書簡は、1915 年 6 月 10 日付けである。

---

[19] Vietsch (1961), S. 150.
[20] Vietsch (1964), S. 90.
[21] Vietsch (1964), S. 77.
[22] Vietsch (1961), S. 371-372.
[23] Vietsch (1961), S. 372-373.

この本はとても興味深く、ドイツが抱くベルギーへの野望について判断するにあたり、知っておくべきことが多く書かれていました。たとえば些細なことですが、まず寓意を含んだ歴史的な位置づけまでさかのぼってみましょう。1430 年、ブルゴーニュ公フィリップ3 世によって、金羊毛騎士団が創設されたことです。フィリップ3 世は、ブルッヘ（訳者駐：ベルギー北西部のフランデレン地方の都市）の織物業をアピールするべく、この羊毛をシンボルとしたのです。織物業こそが、英国の羊毛を富と権力に変えたのです。ブルッヘのこのシンボルは、ベルギーのフランデレン地方に端を発し、こじつけなくともベルギーの歴史に由来するものなのです。ギリシア神話の金羊皮のように、多くの面々がこれまでベルギーを手に入れようとしてきました。しかし、ベルギーを手に入れようとしたことで、いずれも命取りになったのです！ヴァレンティンは、いかにして他国から独立したベルギーという考え方が広まり、実現されてきたかということを如実に描いています。実際、ベルギーの歴史があり、そのような歴史があるところには国民意識も根ざしているのです。国民意識とは同じ運命の下、同じ目的に向かっているということです。そしてベルギーの文化というものもあります。誇り高いフランドル地方のルーベンスの「肉感的な演出」からワロン地方のロップスのきわどいような繊細さまで。これらはもっぱら、ドイツ人の感覚では異国のものなのです。このような模倣と不恰好さ、愚鈍さと獣性、度を越した粗暴。あらゆる類の抑圧、この抑圧が鈍感さと陰険さと結びついており、これこそがベルギー的なのです。このようなものの融合がベルギーにはあるのです。著者のヴァレンティンは、フランドルとワロンの対立を引き合いに出して、ベルギーらしさを否定し、ベルギーを引き裂こうとする、ないし引き裂かなければならないとするような人々に対して警鐘を鳴らしています。フランドルとワロンの対立は、数世紀も遡ります。その対立はしばしば、危機的な状態にまでなり、「Franskillon」や「Flamingaud」といった政党間で用いられる叱責の表現まで生まれました。しかし結局のところ、単なる言語の問題でしかなかったのです。民族的な分裂よりも、カトリック主義と国家という志向がずっと強くあったのです。一方、ドイツ的なものとベルギー的なもの、政治が望むこの二つの文化的なつながりなど元々なかったのです。ヴァレンティンの描いた歴史に遡って、ベルギー的なものを国民国家の中で考えなければならないのです[24]。

ベルギーの歴史と文化、民族の独自性を描いたヴァレンティンの著作の草稿を引用し、ゾルフは独立した国家としてベルギーを認めるべきと訴えた。ベルギーはドイツにとって領土拡大の足がかりではなく、致命傷になるとした。また歴史を遡り、民族や文化に関する話を議論の俎上にのせており、ゾルフの教養と学究心をうかがわせる。

ゾルフは、総督としてベルギーの占領を掌るビッシング（Moritz von Bissing）に対して、ベルギー本国よりもその植民地のコンゴに目を向ける方が得策であると訴えた。その際、コンゴが資源大国であることを強調している。これに対してビッシングは、たとえ資源があろうとも、戦争中にドイツがその利権を得ることはできないとし、ベルギーの占領継続を主張し、ゾルフと対立した[25]。

ただしゾルフは、広がりつつあった反戦運動に組みしていたのではなかった。このベルギー問題を論じた上述のメッテルニヒへの書簡は次のように締めくくられている。

ベルギーの歴史は、今後のこの地のあるべき形とヨーロッパとの関係を示唆しています。歪められ、侵された中立ではなく、国際的な承認の下で独立を確保するのです。ベルギーは元のように軍事的な砦とならなければなりません。英国やフランスの脅威に対して、ドイツ帝国とオランダを守るために。ドイツの領土拡大の矛先として、ベルギーは相応しくないのです。領土を拡大しようというのであれば、東欧と中央アフリカで十分でしょう[26]。

ゾルフは、ドイツの覇権と領土の拡大を断念するのではなく、その矛先を変えることを主張していた。彼の関心と利害は植民地にあったのである。

３　植民地の回復

ドイツ最高軍司令部（OHL）は、シュリーフェン作戦計画に沿って軍事行動を開始した。ただしこの作成計画は、短期決戦を前提としていた。ドイツ側の当初の予想を裏切り、西部戦線は硬直化した。ドイツ軍は備蓄していた砲弾を消耗し、「弾薬の危機」に直面する。1915 年に入ると、OHL は対ロシ

---

[24] Vietsch (1964), S. 31-33.
[25] Vietsch (1961), S. 157-158.
[26] Vietsch (1964), S. 33.

ア攻勢を強めたが、ロシアから単独講和を引き出すことはできなかった[27]。戦線は拡大、戦争は長期化していたにもかかわらず、戦争の見通しについては楽観的な報道が続いた。全ドイツ連盟などの右翼勢力は、大規模な領土併合、経済団体はヨーロッパにおける経済覇権を求め、政府に圧力を掛けていた。ホルヴェークは 1916 年 4 月、ドイツの要求は原状への復帰ではなく、併合を伴う領土変更であることを示唆した[28]。

ゾルフ率いる植民省もこの要求に沿い、中央アフリカにおけるドイツ植民地帝国の構想を掲げた。ゾルフの射程は、中央アフリカのフランス、ベルギー、ポルトガル利権であり、ここを奪取しドイツ領とすることであった。さらに南太平洋の英領のパプアとソロモン諸島、仏領のニューカレドニア、英仏の共同統治であったニューヘブリディーズまで覇権を拡大するという構想を掲げた。同盟国のオスマン帝国に対しては、シナイ半島までの領土拡大を認め、ドイツの経済圏に組み込むつもりであった[29]。

ゾルフは開戦当初、植民地の回復について楽観的な見通しを立てていた。ドイツが宣戦布告した当日、ゾルフは海軍大臣のティルピッツに打電し、海軍が植民地を保護することはできるかどうかを尋ねた。ティルピッツは、ゾルフに論外であると答えた。ヴィルヘルム二世と閣僚の会議の数日後、ゾルフは再び打診したが、その際ティルピッツは、「もはや貴方の植民地ではない、貴方の時代は終わった」と怒鳴ったのである。ティルピッツは、すでにドイツ領のサモア、青島、カロリン諸島のヤップ島から敵国の手に落ちたことを告げる報告を受けていた。カメルーンと西南アフリカも攻撃を受けて後退しており、かろうじて東アフリカが攻撃に抵抗し、持ちこたえているという状況であった[30]。しかし、ドイツ植民地の現状を尋ねたヴィルヘルム二世に対して、ゾルフは「植民地は英国にさしあたり預けておいているのです。戦争が終わったら取り返しますし、さらに領土を拡大できる見込みがあります」と答えていた[31]。

上述のようにゾルフは、英国領インドで外交官としてのキャリアを積み、英国の植民地統治の理論と技術を学んでいた。自他ともに認める「英国仕込み」の行政官だったが、第一次世界大戦時には英国の植民地統治に批判的な見解を示していた。スペインの新聞『スタンパ』*Stampa* のインタビューにおいて、ゾルフは英国やフランスの原住民政策を批判している[32]。

自らの統治理論をまとめた著書の中で、ゾルフは「植民は布教なり」という表現を多用している[33]。ゾルフによれば、原住民を活用するのではなく、教育、文明化することが宗主国の役割であった。サモア総督としての 10 年間、彼が推し進めた政策は、宗主国と植民地、外国人と原住民の間に境界線を引き、両者を隔離することであった。この境界線を自明のものとしながら、支配者と被支配者の関係を明確にする統治体制を作り上げようとしたのである[34]。それゆえ原住民同士の紛争には介入せず、土地や財産の世襲、慣習法についても、外国人の権益が侵されない限りにおいて不干渉を貫いた。外国人と原住民、この両者は全く「異質な」文化を持つことから、お互いに馴染まず、外国人は現地社会へ同化すべきではないというのがゾルフの持論であった。それゆえ両者の境界が曖昧になる、立場が逆転するような事態を避けようとした。しかし開戦後、英国やフランスは、植民地の原住民を戦時動員したことで、ゾルフの植民地統治理論のアンチテーゼというべき構図が現実のものとなった。ヨーロッパの戦場において、英国やフランスの軍服を纏った原住民とドイツ人が銃口を向け合っていたのである。

「黒人の脅威に曝される祖国」という事態は国内の世論を煽り、植民地統治を率いるゾルフへの批判は強まっていく。批判の矢面に立ち、ゾルフは戦後の植民地帝国の構想を唱えたが、中国と太平洋植民地、アフリカのすべての植民地の回復という要求は現実的ではないことを悟っていた。1916 年に入り、西部戦線の泥沼化と反戦運動の拡大、社会主義革命の気運が高まると、ゾルフは非現実的な植民地構想を掲げながらも、現実的な計画を立てていた。彼の現実的な計画とは、太平洋植民地と西南アフリカをあきらめ、経済的利潤の高い中央アフリカに的を絞り、植民地を回復することであった[35]。

---

27 成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）、84-85 頁。

28 成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）、92-93 頁。

29 Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 116-117.

30 Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 116.

31 ヘンペンスタールらによる伝記では、『ジャパン・ウィークリー・クロニクル』*Japan Weekly Chronicle* の記事を引用している（Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 116）。

32 Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 116-117.

33 ゾルフ・ヴェー・ハー（長田三郎訳）（1926）『将来の植民政策』、55-81 頁。

34 中村綾乃（2017）、264‐278 頁。

35 Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 117-118.

1917 年に入ると、英独間の植民地のネガティブキャンペーンは激化した。アスキス（Herbert Henry Asquith）に代わって首相に就任したロイド・ジョージは、植民地の帰属と管理については、戦後に国際司法裁判所を設置し、決定を委ねるべきと発言していた。この発言に対してゾルフは、ベルリン会議で締結された協定の原則に反するとして、ロイド・ジョージに反論した。1884 年から 1885 年にかけて、ベルギーのコンゴ領有をめぐってベルリンで国際会議が開催された。このベルリン会議において、列強による植民地分割の原則が示され、協定が締結されたのである。以降、アフリカの植民地化は、この協定の締結国間で調整をはかるものとされ、いわゆるアフリカ分割が進んだ。ゾルフはドイツ各地を行脚し、植民地問題に関する講演会を開催した。講演の内容は、オランダのメディアを介して英国にも伝わり、さらに反ドイツ感情を煽った[36]。

当初、ゾルフはドイツ植民地の回復と中央アフリカの領土拡大を要求していた。しかし戦況の悪化とともに、要求を引き下げ、ベルリン会議の原則に立ち戻り、列強間で協力体制を敷き、植民地の自立的な発展を促すことを主張するようになった。さらに原住民のアフリカ人も植民地の管理行政に加えていくべきと述べている。ドイツ一国による支配から列強による共同支配、さらにアフリカ人もそこに加え、最終的にはアフリカ人自らが管理していくべきと主張が変化していったのである[37]。対外的なアピールに加え、植民地の人々の反英感情を煽る意図もあったと考えられる。しかしこのゾルフの主張は、英国の世論を刺激し、和平交渉は遠のいた。

1918 年 9 月、オーストリア政府が講和交渉に向けて動き出し、ブルガリアが休戦を申し出たことにより、ドイツ国内の政局は一気に動き出す。参謀長のルーデンドルフ（Erich Ludendorff）は、新政府の樹立、休戦と米大統領のウィルソン（Woodrow Wilson）の十四か条による講和の申し出を迫った。宰相のヘルトリング（Georg von Hertling）は辞任し、社会民主党を含む多数派三党を中心とした新内閣の発足が議論される。10 月、ヴィルヘルム二世は、マクス（Max von Baden）を宰相に任命し、帝国最後の内閣となるマクス内閣が発足した[38]。この内閣の下で、ゾルフは外務長官に任命され、植民長官と外務長官を兼任した。中央党のエルツベルガー（Matthias Erzberger）は外務省の政務次官に任命されたが、ゾルフの政治知識の欠如を理由に政務次官のポストに就くことを拒否した[39]。

外務長官としてのゾルフは、休戦交渉の準備と皇帝退位問題に追われた。ただし、ゾルフが主導権を握ったというよりも、戦争目的に執着する保守派と休戦、講和の即時達成を求める左派勢力との調整役に徹した。ゾルフは皇帝の退位を示唆し、ウィルソンの講和を受け入れようとした。しかしヴィルヘルム二世からは「ひねくれた裏切り者」と呼ばれ、軍部からも不評を買った[40]。ゾルフの持ち前の慎重さと思慮深さが仇となり、決断が遅れ、休戦と講和条件のハードルをあげることとなったのである。ルーデンドルフは一転して戦争継続可能と主張し、海軍も休戦に反対したために、統率が不可能となっていく。

ドイツ革命の勃発後、皇帝ヴィルヘルム二世は退位し、帝政は崩壊した。社会民主党のエーベルト（Friedrich Ebert）が新政府を率い、帝政期の官僚の指導は継続した。外務長官のゾルフも、その地位にしばらく留まった。1918 年 12 月、ゾルフは外務長官および植民長官を辞職した。ヴエルサイユ講和条約によりドイツは海外領土を放棄し、植民省はその役目を終えた。ゾルフにとって、全植民地の放棄は受け入れ難い現実であった。ただし反共和国の立場にまわる帝政期の官僚や軍人が多い中で、ゾルフは彼らとは一線を画し、いわゆる匕首伝説を唱えるようなこともなかった。

4　おわりに

開戦当初、ゾルフは祖国防衛という戦争の大義を掲げ、城内平和の旗振り役を演じた。しかし、高揚するナショナリズムに市民層を巻き込んだ一方で、ドイツ外交の未熟さを認識しており、英国を敵に回したことに対する懸念を強めていく。ドイツ軍の占領の実態と戦線を視察した後、ゾルフはベルギーの中立侵犯が失策であったことを認め、占領の解除を主張した。しかし現地の総督府と対立を深め、孤立するようになる。ゾルフは、歴史的な背景を踏まえた上でベルギーを独立国家として承認するべきと訴えた。学究者らしく、戦略一辺倒の議論からは一線を画し、被占領国の住民の歴史、言語や文化に理解を示していたのである。ただし「西欧」に対して示した理解とは裏腹に、「東欧」とアフリカをドイツの覇権拡大の矛先としている。

36　Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 116-118.
37　Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 118.
38　成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）、109 頁。
39　Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 136.
40　Hempenstall / Tanaka Mochida (2005), p. 137.

第一次世界大戦を通じて、ゾルフの政治思想に大きな影響を与えた人物といえば、彼が先達と仰いだメッテルニヒである。市民階級出身のゾルフに対して、メッテルニヒは伯爵号を持つ貴族であった。メッテルニヒが旧外交時代の外交官であるとすれば、ゾルフは新外交時代の外交官である。またゾルフが閣僚の一人であったのに対し、メッテルニヒは大戦中に外交の第一線を退いていた。1915 年 10 月、メッテルニヒは駐トルコ大使として、コンスタンティノープルに派遣されたが、同盟国であったトルコのアルメニア人迫害を告発したために、翌 16 年 10 月、大使としての職を解かれた[41]。1917 年 8 月 17 日付けでゾルフが認めた書簡には、「国境について手紙で議論するのは危険すぎるから、沈黙を守らざるをえないのです」とある[42]。たとえ私信であっても、ゾルフは立場上、慎重に言葉を選んでいたことがうかがえる。

ゾルフとメッテルニヒは、世代と出身階級、立場が異なり、またアルザス・ロレーヌ問題では意見が対立し、ウィルソン外交の評価も分かれた。しかし両者ともに英国の国内事情と外交、植民地統治に通じており、敵国である英国の国民の目線に立って、戦争を分析することができたのである。メッテルニヒはゾルフに対して、自国の政府や国民ではなく、敵国である英国の国民に働きかけ、英国の政治分裂を引き起こすことを促していたのである。英国の挙国一致内閣（第二次アスキス内閣）にも、戦争を不必要に長引かせ犠牲を出すよりも、ドイツとの講和交渉に応じようする動きがあった。これに対して、ロイド・ジョージはドイツが降伏するまで徹底抗戦を訴えていた。1916 年から 1917 年末までのゾルフとメッテルニヒの往復書簡では、英国の政治分裂の機を捉えて、米国の仲介による停戦交渉へ持ち込もうとする二人の意図がみてとれる。

ゾルフは、大戦後もドイツの海外領土、中でも中央アフリカの回収に固執した。しかし、日本での滞在を経てドイツ植民地に対する主張が変わっていく。東京滞在中の 1927 年 7 月、ゾルフは 1919 年に上梓した自著の重版を断ったのである。同書は、彼の植民地構想を論じたものである。またシュネー（Heinrich Schnee）やリンデクイスト（Friedrich von Lindequist）を中心とした植民地の回復キャンペーンにも苦言を呈していた[43]。帝政期、シュネーは東アフリカ総督、リンデクイストは南西アフリカ総督として、ゾルフとともに植民地統治を率いていた。

ゾルフは旧外交から新外交、ドイツ帝国から世界帝国、帝政から共和政への橋渡し役となり、30 年代はヒトラーの権力掌握を阻止しようとした。ただゾルフは、既存の政党を率いることも、また特定の政党に居場所を見つけることもできなかった。ドイツ民主党に入党したこともあったが、ナチ党によって解散に追い込まれる。共産党と社会民主党の左派とは相容れず、長年にわたり中央党とも対立していた。既存政党は彼にとって一長一短だったのである。党利党略に動くことはなく、ヴィッチェの言葉を借りれば「政党ホームレス」であった[44]。

ゾルフが会長を務めたドイツ協会 1914 は、超党派の政治クラブであり、多様な職業や出身のドイツ人が集った。しかし第一次世界大戦中の戦況の悪化とともに、同協会の会員にも亀裂が走り、ゾルフは幻滅するようになる。1930 年代に入ると、この協会の会員は、ナチ党に対抗する新政党の旗揚げをゾルフに期待した。ゾルフは、ナチ党に対抗する勢力を結集し、ドイツ文化と教養を重んじる市民階級の中道政党の結成を計画していた。この中道政党の結成を掲げた際、ゾルフの頭の中には、ドイツ協会 1914 の亀裂が頭によぎったであろう。ゾルフは、かつての論敵であり、カトリックの牙城である中央党、社会民主党の左派と共産党の支持基盤を排除し、彼らと共闘することに躊躇したのである。そのためにゾルフの新党結成は時機を逸し、反ナチズムの結集軸は瓦解してしまう。

駐日大使として 8 年間、日本に滞在し本国を離れたことで、ゾルフの植民地構想はどのように変わり、彼の政治家としての理念と政策にどのような影響を与えたのか、特にゾルフが構想した反ナチスの結集軸たるべき中道政党の構想とその挫折について明らかにすることが今後の課題である。

---

41 Vietsch (1961), S. 231.
42 Vietsch (1964), S. 57.
43 Vietsch (1961), S. 291.
44 Vietsch (1961), S. 225.

■　文書館史料

Bundesarchiv, Koblenz (BArchK), N1053.

■ 主な研究文献

（欧文）

Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005) *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Japanisch-Deutsche Gesellschaft (ベルリン日独センター, 日独協会) (2005) *Brückenbauer: Pioniere des Japanisch-Deutschen Kulturaustausches* （日独交流の架け橋を築いた人々）, München: Iudicium.

von Vietsch, Eberhard (1961) *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

von Vietsch, Eberhard (Hrsg.)(1964) Eberhard, *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.

Tunnat, Frederik D (2014) *Die Deutsche Gesellschaft 1914 und ihr Gründer,* Berlin: Edition Vendramin.

（邦文）

ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳（1926 年）『将来の植民政策』有斐閣。

中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層－混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編（2017 年）『ドイツと東アジア　1890‐1945 年』東京大学出版会。

成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）『ドイツ史 3』山川出版社。

日独交流史編集委員会（2013 年）『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書店。